

## 弔 辞

加藤裕己君、今日このような場で君と対面することになろうとはまったく想像できないことでした。孝子夫人、英明君、孝明君はじめご遺族の方々に心よりお悔やみ申し上げます。人と生まれた以上、誰もがいつかは土に還るのが定めとはいえ、あまりにも早い別れに私も深い悲しみに襲われています。君を失った今、私の人生においていかに君が大きな存在であったかを改めて実感しています。

昭和45年4月、君と僕は春爛漫の駒場で同じクラスの新入生として出会いました。前の年には紛争の影響で東大の入試が中止となり、入学した年にも70年安保、ベトナム戦争など、学生にとって政治の季節のピークは過ぎたとはいえ、キャンパスにはいまだに熱気が残っている、そうした時代でした。しかし、今のような閉塞感はなく、私たちを含め多くの学生は青春を謳歌したものです。

ワンダーフォーゲル部に所属し山登りを楽しみ、気の合う友達とサッカーに興じていた42年前の君は、あくまでダンディーで、当時は黒い学生服も見られた中でのブルー・ジーンズ姿が、今でもくっきりと目の奥に焼きついています。いつともなくクラスのリーダー的存在となった君と、私も親しく付き合うようになりました。

私たちが2年になったとき、宇沢弘文先生がたまたま駒場の学生を対象にケインズの『一般理論』を講義するゼミを開講され、君と僕は二人で本郷キャンパスにある先生の研究室を訪れたのでした。経済学部のゼミは通常3・4年の2年間ですが、私たちは3年間先生に教えていただく幸せに恵まれました。そこでは経済学を学ぶだけではなく、生涯の友に出会うこともできました。

昭和49年4月、加藤君は東京大学卒業とともに経済企画庁に入庁されました。経済企画庁は、戦後一貫して官庁エコノミストの粋を集めた経済官庁の頂点でした。昭和48年秋に生じた第一次オイル・ショックは高度成長の終焉を告げる象徴的な出来事でしたが、変動相場制への移行ともども日本経済は新しい時代を迎え、難しい政策運営が求められる中で、君は官庁エコノミストとして王道を歩まれました。1982年から4年の長きにわたり OECD で活躍されたことは、国際派のエコノミストとしての君に対する大きな期待があつたの事と思えます。

パリで過ごした4年間は、また私生活においても楽しい思い出をたくさん生んだことでしょう。当時、日本銀行から OECD に出向されていた深尾光洋氏、武藤恭彦教授らと家族ぐるみで一大スキー旅行をされたことは語り草になっています。後に、そのときのメンバーに私たちも加えていただき、いずれも幼い子ども連れのスキー旅行をしたことは私にとっても楽しい思い出です。

弔 辞

国際派エコノミストとしての活躍，経済白書の執筆，経済研究所における研究業務，これらを立派に成し遂げた君は，若き日に期した官庁エコノミストとしての本懐を見事に遂げられました。

退官後は東京経済大学で若い学生の教育に情熱を注がれてきました。日本の経済・社会がまた一つの転機を迎えた今，君は，官庁エコノミストとしての経験をふまえて，さまざまなことをもっと若者に伝えたかったに違いありません。

人がこの世に残す最も尊いものは，残された人々の心の中で消えることのない面影だと思います。私の生のある限り，君は私の心の中で生き続けます。42年間どうもありがとう。

願わくば，君の霊の安らかなることを。

心よりご冥福をお祈りいたします。

平成 24 年 1 月 29 日

東京大学教授 吉川 洋